

酒匂川と足柄の歴史（2）

「校長室より」のNO.1で、学校近くの足柄平野上には、〇〇島という名前の地名が多いことを書きました。酒匂川はかつて足柄平野の中央を網目状に流れていて、その自然堤防の上の微高地が〇〇島と呼ばれるようになったと説明しましたが、覚えていますか。

歴史上一番近い時代に酒匂川が足柄平野の中央を流れたのは、江戸時代の1700年ころです。1707（宝永4）年に富士山の大噴火（宝永噴火）があり、関東地方にたくさんの火山灰が積もりました。このあたりにも30～60cmほど積もったそうです。川底に火山灰（砂）が積もると水面が上がりますから、当然洪水が起きやすくなります。1708年の大水で岩流瀬土手と大口土手が切れて、酒匂川は現在流れている場所から流れを変えて、足柄平野の中央を流れるようになりました。班目、岡野、千津島、壙下、竹松、和田河原の6つの村の人々は、やむなく現在のアサヒビール工場の西側あたりの丘陵地に移住しました。

大きな堤防の再建にはたくさんの資金と人手が必要です。この堤防の再建にあたる中心人物になったのが、川崎宿の名主であった田中丘隅（たなかきゆうぐう）です。時は徳川8代将軍吉宗の治世、江戸町奉行はおおおかえちぜんのかみただすけ大岡に取り立てられた田中丘隅が、幕府の役人として足柄に来て堤防の再建にとりかかったのは、1725（享保10）年のことです。田中は「民間省要」という著書があることで知られていますが、これは治水や交通、税などのしくみについてまとめたものです。

田中をリーダーとして堤防の再建は進み、大口土手は文命東堤、岩流瀬土手は文命西堤として再建されました。文命というのは、中国の治水の神様である禹王（うおう）の別名です。堤防には文命をまつた宮（石碑）が建てられています。田中はそんな中国の故事にも詳しくたのです。そしてこのお宮で毎年お祭りをを行うようにして、人々が堤防に親しみ、歩く人の足で土が踏み固められるようにしました。これも前回紹介した武田信玄が、釜無川の治水工事に作った堤防に神社を建立し、毎年神輿を担がせた先例にならったものと思われる。

こうして酒匂川は元の流れ（現在と同じ）に戻りました。「めでたしめでたし」…とはならなかったのです。二つの文命堤によって川の西側への氾濫はなくなりましたが、今度は大水の時に川の東側、つまり現在の大井町や鬼柳など小田原市の北部地域の堤防が破れて浸水するようになりました。当時の農民たちが小田原藩や幕府に堤防の修復を求めて陳情を繰り返した記録があります。

こうした中で幕府の代官である蓑笠之助（みのかさのすけ）が酒匂川全体の堤防の強化工事に乗り出し、ようやく酒匂川の治水は一段落つきます。とはいえ、小規模な浸水は日常茶飯事でしたし、江戸時代後期に活躍した二宮金次郎の伝記にあるように、堤防（土手）の補修は毎年行う必要がありました。酒匂川とのつきあいは大変だったのです。